

「世界のウチナンチュ」との交流から気づきを得た学生たち

—日本移民学会シンポジウムで琉大生が報告しました！

人文社会学部人間社会学科 野入直美

2023年6月25日、神田外語大学で開催された日本移民学会 大会で、琉球大学人文社会学部人間社会学科3年次の上里あんさん、仲宗根成美さんが招待発表を行いました。お二人が登壇したのは開催校シンポジウム「「世界のウチナンチュ」を考える—広がるウチナーネットワークの課題と可能性—」の第一部で、第7回世界のウチナンチュ大会（2022年10月31日～11月3日）の参加者を対象とする大会調査で調査員を務めた学生が、大会参加を通して考えたことを語るというトークセッションでした。



上里さんと仲宗根さんは、過去の大会にほとんど参加したことがなく、「世界のウチナンチュ大会」という言葉を聞いたことがあっても関心がさほどなかったそうです。沖縄で生まれ育った学生にとり、自分がウチナンチュなのは当たり前で、改めて考えることもありませんでした。

調査員として大会会場に入り、そこに集う人たちをまのあたりにした二人は、「自分と同じルーツを持つ人がこんなにも膨大な数、いるんだ」ということにまず驚いたそうです。また、沖縄に血統的なルーツがない人も「世界のウチナンチュ」に含まれていることを知ったり、沖縄移民の歴史を通して、様々な国で沖縄ネットワークが拡大し、コミュニティが形成され、それらが沖縄について発信していることを実感したりすることができました。

「自身がウチナンチュであることを誇りにも思うようになった。沖縄から離れた場所のウチナンチュと交流することで、自分たちでは気づけない沖縄の良さを再発見できる。」

「世界には沖縄にルーツがある人がこんなにもたくさんいるんだと思うとすごく嬉しくなって、自身のウチナーアイデンティティの肯定に繋がった」

「世界のウチナンチュの人たちは、沖縄で生まれ育った自分より強く、沖縄への愛や関心をもっていた。自分に沖縄文化に対する想いがあまりなく、自分の手で習得してい

くものや、沖縄を象徴する文化として発信できるものを持っていなかったと気づいた。」

大会の中でとくに印象的だったのはグランドフィナーレの、会場を埋め尽くす観衆とともに味わったウチナンチュとしての一体感だったそうです。沖縄の伝統文化のすばらしさも、大会参加によって改めて実感することができました。

これまで、沖縄のことを「地方」と感じ、言葉を「なまっている」と言われた経験もあり、ウチナンチュである自分を肯定できないこともあったそうですが、「ウチナンチュ大会に参加してからは、違っているからこそいいと思えるようになりました。沖縄の方言などは日本的な文化とは少し違うかもしれないけれど、違うからこそ魅力的だし、何より世界でこれだけのネットワークを持ち、沖縄から離れていても沖縄ルーツを誇りに思っている世界のウチナンチュの存在が、私のウチナーアイデンティティを肯定させてくれました。」

上里さんと仲宗根さんは、沖縄県民にとって世界のウチナンチュとの交流には大きな意義があると考えています。交流によって、当たり前すぎて沖縄を意識しなかったこれまでの日常を越えて、沖縄に対して自分ごととして向き合えるようになっていく、能動的な変化が起こりうるのです。

沖縄の若者たちが世界のウチナンチュとの交流から豊かな気づきを得たことが伝わるすばらしい報告で、会場からは大きな拍手が寄せられました。上里さん、仲宗根さん、ご苦労様でした。

*第7回世界のウチナンチュ大会調査は、産学連携研究経費「JICA 日本と中南米間の日系人の移動とネットワークに関する研究」によって実施され、海外県系人とのネットワーク構築にかかる琉球大学グローバル教育支援機構ミッション実現戦略分経費から補助を受けました。記して感謝します。

沖縄県民にとってのウチナンチュ大会

沖縄の文化の消失は自身のアイデンティティの消失に繋がることを意識せず感じている。
大会は、自分自身を構成する沖縄アイデンティティの自覚、肯定につながる。

沖縄の人だからやらなきゃいけないという強制的なしがらみ
➡**能動的な姿勢**

沖縄県内の若者からも新たなネットワークの種が生まれるのではないかと期待できる大会